

いしかわの自然百景フォトコンテスト

特選に 上田 昭夫氏の「手取川夕照」

県では平成5年9月に県内の自然景観を代表し、将来に伝えるべき優れた自然景観地として「いしかわの自然百景」を選定し、同年10月から当該百景を対象としたフォトコンテストを実施してきた。118人から701点と多数の応募があり、撮影景観は93景に及んだ。「いしかわの自然百景」編集委員会(会長 粕野義夫 金大名誉教授)において次のとおり特選1点、佳作3点が選定された。

◆特選

上田昭夫(54) 石川郡野々市町 「手取川夕照」

◆佳作

井村 稔(56) 金沢市戸水町 「河北潟と立山連峰」

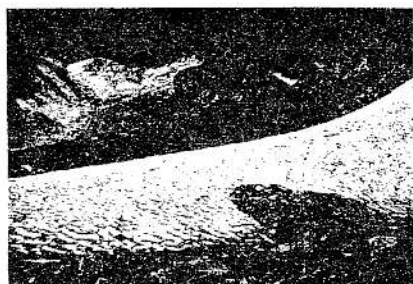
舟田節子(43) 金沢市橋場町 「夏のコントラスト」

森正太郎(53) 金沢市額新町 「春の白山」

商工石川 '94 11月号より



特選 「手取川夕照」



佳作 「夏のコントラスト」



佳作 「春の白山」



佳作 「河北潟と立山連峰」

山溪の「分県登山ガイド 石川県編」をナカオが担当することになり、事務局長もそのうちの13コースを拝命。写真撮影とコース調査に動いています。そのうち、自然百景と重なったものを応募して射止めたのがこれ。「テレフォンカードにして配ろう」と思ったら、版權は賞と引き換えに県に渡っておりました。

受賞の日、集合場所は環境部の廊下。ふむふむ、自然保護課はここかー環境政策課はーなんだ、梶さん隣の部屋に変わっただけなんだーと大発見した気になって、ふと見れば梶さんの姿。思わず手を振ってしまった私ー。勤務中なのにー。どこまでもミーハーな事務局長なのでありました。



時の流れは早いもので、金大ワングル部に籍を置いた時から、かれこれ三十年にもなろうとしています。当時、山が好きで入部はしたものの、シニアに入った頃には活動をやめてしまい不真面目な部員でした。

それが六年前のワングル部創立三十周年山行に、職場の同僚で若手OBの大川さん（27期）にお誘いを受け、白山に登ったのが、また登山を始めるきっかけとなりました。

記念山行では、南竜までの長かったこと。若いOBや現役に混じって、ゆっくりとした足どりでどうにか南竜にたどりついた時には、辛かったことも忘れ、ワングル当時の熱い思いが蘇ってきたのです。

それから六年。舟田さんに紹介していただいた（编者注：頂上ワンデリングが同じパーティでした）くろゆりクラブに入り、北陸百山の登山を一つの目標にしているところです。

私が登山を始めるまでは海行き専門の主人でしたが、今では「今度は何処へ行こうか？」と、土・日を楽しみにする程、山好きになってしまいました。

オレンジ・ロードと称する「石川門—御前峰完歩（完走）コース」は、20周年25周年に実行されていました。卒後10年たってもその血をたぎらせていたOBがいます。

今年の夏は天気にも恵まれ、主人と二人で（時には、末娘がついて来ることもありましたが）北アルプスの方へ、何度か行ってきました。どこの山へ行っても、頂上に立った時の感激は、その山でしか味わえないものですね。

その中でも剣岳は印象的でした。距離が長く苦しい尾根歩きを覚悟しながら、馬場島から早月尾根のコースを選びました。というのは、剣岳は初めての山だし、少々不安を抱きながらも岩場の少ないこのコースをあえて選んだのです。

朝発って、お昼過ぎに早月小屋に着くまで、ガスの中をただひたすら歩き続けるだけの苦しい歩き。しかも、小屋に着いてからもガスで視界ゼロ。それでも小屋の前の広場で寛ぐうち、ガスが切れて剣の岩峰が目の前に現れた時には、長い尾根歩きの苦しさも吹きとぶ思いがしたものです。また、夕食後、沈んだ夕日に剣の稜線がくっきりと浮かび上がる様や、雲海の中に大日岳や奥大日岳がどっしりと大きな山容を見せる様は、何ともしようのないものでした。

これからも、自分の体力にあった山登りで、山の楽しみを増やしていきたいと思っています。あわよくば、何処かの山で、金大ワングルのみなさんに出会えることを期待して…。

日

本の夏、キンチョーの夏、正しい夏が存在した今年。その暑さにとち狂ったのか、怪しげなアンチヤンが白山に出没。その変人とはマウンテン・バイクを2702メートルの御前峰頂上まで持ち上げてしまった男、竹内和彦くん。なんなんけいこのアンチヤン。その奇人廻りに恐れおののく人。ただただ口をポツカリ空ける人。強陀ヶ原で乗れるし「イネー」と妙に納得してしまう人。中学生の一群からはヤンヤヤンの喝采。その日、銀座と化した砂防新道をすれ違う人々の反応は様々でした。果たして彼の心中にいかなる思いがあったのか……それは定かではありませんが、私達同行の者はひたすら同じ歳とは思われないよう一歩さがって行動。しかし彼が本当にピークまで笑顔で上げてしまった時、爽やかな一陣の風が同行の胸の中にも吹いたのでありました。折しも山はもう秋の気配を見せ、底抜けに青い空は粉れもなく秋の始まりを告げていました。

ワングルバカは十年経つても変わっていません。ちなみに彼は、愛知県の高校教師です。



金沢市黒崎町 大野 直子

(27期)

自然人13号（'90年秋）より

編集長から依頼されたものの、何しろ、いい加減を絵に描いたような会のことであり、こうして書くのもおこがましいのだが、金大ワンゲルOB会を名乗る以上、その実体を明らかにしておく必要があると思い、ここに記すことにした。

今を遡ること10年余、1984年5月の連休に、久富、深田、松下、梅の4人で笈ヶ岳へ登ったのがそもそものきっかけといえようである。あまりの気分のよさに、来年は白山、次はまた笈ヶ岳といった具合で、途中からは栃尾も加わり、“春のPW”として現在も続いている。

ところが、2年ほど前から、何がどうなったのか、鎌倉在住の松下を除く4人が狂ったように登りだしたのだ。百四丈の滝や崖など、沢もやり始めた。もちろん、それまでも各人で山は続けていたのだが、一番登っていた小生でも年間十数回程度であったものが、1993年の手帳には、低山ハイキングを含め42回の山行が記録されている。このうち約半分がメンバーのどれかと登っている。4人がそろふことは少ないが、上馬さんと山行を共にする機会は増えた。

このようなことになった要因として、まず週休2日制が挙げられるし、互いが刺激しあったということもあるだろうが、やはり、何といっても気心知れた仲間と行く楽しさによるところが大きいのではないかと思っている。

そんな折、昨年(1993年)の11月ころだったか、北国新聞社の月刊誌「アクタス」の記者が、加賀能登の名山(カラー見開き)の連載を引き受けてくれそうな山岳会を紹介してほしいと職場(県自然保護課)へやってきた。いくつか候補をあげたが話がまとまらず、結局頼み込まれてしまった。メンバーにも相談し、何とか引き受けることになったのだが、このとき、どうしても会に名前を付ける必要に迫られ、初回の原稿締切りの前夜、苦しまぎれに国語辞典を数回開いたページの中から決めたという無責任さで、深い意味はない。もちろん、ヤブこぎは嫌いではないが、好きでたまらぬというわけでもない。どちらかというと、気がついたらヤブの中にいることが多いというのが当たっている。

一応、これまでに「アクタス」に執筆したメンバーとその山を紹介しておこう。○の数字は、掲載月である。

- 上馬 康生(15期)自然保護担当(顧問) ⑧白山
- 梅 典雅(19期)環境政策担当(企画係) ①笈ヶ岳、②三村山、⑤大山
⑦妙法山、⑨四塚山
- 栃尾 俊治(20期)生産技術担当(装備係) ③猿山、⑥鳴谷山
- 久富 象二(20期)労働金庫担当(食料係) ⑩大門山
- 深田 進(20期)現場監督担当(記録係) ④医王山、⑪大日山



さて、これから「グループ・薮」はどこへ行くのか、それはだれにもわからない。ただ、「アクタス」はあと2年はあるし、当分の間は、県内の山を中心に、山スキー、沢のぼり、県外遠征、他の山岳会との交流登山、反省会などを散りばめつつ、山頂のビールと下山後の温泉というオジサン的快樂山行を続けていくに違いない。



去る7月28日、21期の連絡員をお願いしていた 江口 喜美江さんが病死されました。まだ若く、二人のお子さんを残しての逝去に胸が痛みます。

追悼文を同期の榎さんをお願いしました。21期の連絡員は、山口 克己さんが引き受けて下さいました。

喜美江ちゃんのこと

21期 榎 陸美

一昨年の夏、喜美江ちゃんの家族と私たちの家族は白山で一緒になった。尚志君も友加子ちゃんも白山は初めてだったが、室堂まで元気いっぱい登ってきたようだった。「子どもは元気やわ。私の方がバテた。」と彼女はご主人と顔を見合わせて笑っていた。この時、喜美江ちゃんの体が大変なことになっていたとは、もちろん誰も知らなかった。

その年の暮れ、喜美江ちゃんは大腸ガンの手術のため入院した。彼女は自分の病気をはっきりと知っていた。今どんな状態なのか、そのためにどういう治療をしているのかということを中心にきちんと把握していて、会うといつも私にも詳しく説明してくれた。大腸の方は、きれいになったのだが、今度は肝臓に陰があるという。深刻な状態であったはずなのに、しっかりとした話しぶりに、私は心のどこかで安心することができたことを覚えている。

翌年の7月、子ども達の夏休みに合わせて、再び検査入院になった。子ども達は、ご主人の実家（愛知県）で過ごすことになっていたのだが、せっかくの夏休みに子ども達に何もしてやれず、さみしい思いをさせるばかりだということをとてども気にしていた。尚志君は尚志君で、学校で「ぼくのお母さんは夏休みに、がんばって病気を治すために入院します。だから、ぼくもおばあちゃんの所でがんばります。」といていたそう。

できるだけ、自宅で療養したいという喜美江ちゃんの強い意志で、夏休みが明けて間もなく退院することができた。通院しながらの生活はかなり大変だったようだ。「病気を治すのが私の仕事。病院へは仕事をしに行っていると考えことにした。」と自分の中で一生懸命に割り切ろうしているようだった。しかし、「掃除もごはんもいっぱい手抜きしてるんや。主人は、何もせんでいいよっていつてくれる。子どもには、うんうんって話聞いてあげられるだけでもいいかなって思ってるんや。」と話す彼女に「そうや、それが一番いいよ。」と答えていた私は、彼女の言葉の後ろにある辛さをどのくらい理解していたのだろうと、今になって思う。

喜美江ちゃん自身の病気と真正面から闘おうとする強い意志と、家族の暖かい応援の中で、病気ははじめ奇蹟的なほど回復していたらしい。しかし、今年の4月、ちょうど喜美江ちゃんの誕生日の頃、再び入院となった。6月末にはかなり元気になり、もうすぐ退院できると、とてもうれしそうだった。が、退院して五日後、再び入院。息苦しそうに肩で息をしながら、薬のせいで眠りに落ちていくあい間、あい間に、一生懸命に容態を説明してくれる。膨れ上がった足がとても痛々しかった。「また来るからね。」といて病室を出たとたん、涙があふれてきた。

その二日後、私は南竜で職場の仲間と呑気に流れ星を見ていた。ちょうどその頃、喜美江ちゃんは、静かに遠くへ旅立っていたのだった。

喜美江ちゃん、天国で安らかに眠ってください。

私が「不況と違う理由で ヒマになった」わけ

23期 鳥越 伸博

先日、編集長の舟田さんから
「7月に発行したOB会報の編集後記に書いて
ある（といっても、これは舟田さんが書いたの
ですが）私が「不況とは違う理由でしばしヒマ
になったこと」について、知りたいがっている人
がいるだろうから、次のOB会報に書いてほし
い」

と、突然、原稿依頼を受けました。

自分としては、あまり褒められた話でもない
し、どちらかと言えば、恥ずかしい部類の話な
ので、こんな所で暴露したくもないのですが、
考えてみれば、これも「ワンゲルOBの山での
事故の話」（？…そんな大袈裟ではない）かとも
思い、編集長の意を汲み、あえて紹介すること
にした次第です。

それでは、話の本題に入ります。今程「事故
の話」と言ったので、結論から先に言いますと、
「春スキーに行って、転んで膝下の骨を折って、
2ヶ月入院していたので、しばしヒマだった」
というのが真相です。以後、多少恥ずかしさもある
ので、自分のことを「T君」として、事の内容を
お話しします。

今から半年程前の、5月14日、15日の2日間、
職場の仲間20人程で、立山へ春スキーに出掛け
ました。スキーがとびきり上手いというわけでは
ない初参加のT君は、多少緊張気味に出発し
ました。

14日は快晴で、朝一番のケーブルに乗り、9
時頃にはみくりが池に着き、しばし休憩の後、
雷鳥沢へと向かいました。一度雷鳥沢のテン場
まで滑り、剣御前山荘へ登り返します。T君は
日頃の運動不足を痛感しつつ、快晴の立山を
楽しみながら、何とか剣御前山荘に着きました。

昼食をとった後、もう少し足を伸ばし、剣沢の
小屋まで行ってみようということになり、5-
6分で剣沢まで滑り降りました。T君は、剣沢
小屋の前から、まだベトリと雪のついた剣を
穴のあく程見て、大感動に浸っておりました。
当然まだこの時は、我が身に災難が降りかかろ
うとは夢にも思わず…。

途中で剣を振り返りつつ、剣御前へ登り返し、
いよいよ雷鳥沢を滑ることになりました。雷鳥
沢上部はさすがに急なので、スキー無級のT君
は、シュテム・ターンに毛のはえた程度でゆっ
くりと降りて来ました。半分程来ると傾斜も緩
くなりました。余裕を持って滑れそうだなと思
って滑り出し、2-3回ターンしたその時、ド
ーンと前へつんのめるように転んでしまいました。

スキーが外れなかったのに、足を捻ったな
という感じはあったのですが、その時はせいぜい
ネンザ程度と思い、とりあえず、下までゆっく
りとボーゲンで滑り、そこからみくりが池まで
はストックを杖がわりに、何とか戻って行きま
した。さすがに宿へ着くと、足をついて歩くこ
とは出来ませんでした。

そして翌日金沢へ帰って医者に見せると、先
生はレントゲン写真を見ながら

「骨折してますねえ。手術しなきゃいけないで
すねえ。」

…このようにして、T君の2ヶ月に及ぶ「ヒマ
な日々」は始まったのでした。

P.S. おかげさまで、現在は、10cmの程のボル
ト2本がまだ入ったままですが、ほぼ元通りに
戻っています。やはり、山には思わぬ事故の素
因が隠れていることを痛感した出来事でした。

（単に、スキーが上手くなっただけ…という
声もありますが…）



フィールド。ないし話

(33)

た身には、日知り山の山の知識は意外と少なく、それすらブラシクのためあてにならない。新聞や山岳雑誌の山行企画を採してみたりしたが、これにも眼界があった。

その矢先、犀奥の山々の名を落字で見たのである。犀奥は、倉谷に山小屋を持ち、高三郎山で新入生トレーニングを行う金大ワンゲルにとってまさにフィールドであった。懐かしい山の連なりが眼前にうき、涙の出る思いであった。

一日読み通し、翌日、ナカオ山岳会の林代表に入会希望の手紙を出す。ちなみに、同会はずれまで女性会員は未婚に限っていた。ワンゲル歴がものを言ったのか、会員の場にはべつた眼力ある猫ちゃんを身をすり寄せて来てくれたおかげか、入会許可がおりた。夫には、入会

ないし話をしたくても、介の夫婦にとつての現実、フィールドを持つことすらまだ難しい。今回は、元山友の主婦が社会人山岳会に入り、家族も巻き込んでのファミリー登山を楽しむにいたった話。

それは四年前の初夏、書店で金沢ナカオ山岳会のかか・のと百山を目にしたところから始

フィールド。ないし話



舟田 節子
ふなだ・せつこ 河北郡津幡町生まれ。金沢大学理学部卒業。学習塾指導者。金沢ナカオ山岳会会員。金沢市橋場町。37歳。

3男を背中に担いで

ゴロ寝族の夫も大変身

と次回の山行予定、事後報告後に引かぬ性格をあきらめられ、ついに反発はされなかった。

十年近いブランクだっただけに、再開したのでこの山行は死に物狂い。しかし自然は美しく山仲間温かく、汗は快かつた。月二回の山行、その日のた

へは子連れが可能だったから引け目は半減した。子供たちは、クワガタ、イモリ、ヤゴなどの動物が抱同定だった。

さて、いよいよ休日ゴロ寝族だった夫の登場である。きつかけは悪いが、子連れ登山であった。またしてもこのんぽは経胆した女房の「せめてくるゆり



え・林 正博

ナカオと私

(金沢ナカオ山岳会 30周年記念誌
'92.11 発行より転載)
15期 舟田 節子

「ナカオ」を知ったのはかなり古い。十周年記念の「犀奥特集号」を、学生時代に耳にしている。高三郎をホームグラウンドと心得る身には、シマ破りと思える情報であった。しかし、暇な学生ではなく社会人であることに畏怖の念を覚え、かつ、仲間がいるから山に登るといった感傷に溺れていた時期でもある。卒業後の器にといった発想は微塵もなかった。そしてお年頃の身は、身上書等も用意したけれど、登山が趣味とは書くのも憚られる時代。ましてや相手に同じ趣味を望むべくもない。常識的には、ここで山から足を洗うことになるはずだった。

「かが・のと百山」を媒介としての入会は、朝日新聞の「フィールドないし話」に詳しい(そんな一流新聞に載ったのも、ナカオのおかげである)。あれには書けなかった思いがけぬ妊娠の理由。実は冤がからんでいる(墓場へ歩いていくはずの類の話なのだが)。

学生時代にも諦めざるをえなかった冤が、春合宿の地と決まった。月二回の山行をようやく確保できた身にとって、連休三日の「わがまま」は、到底さらりと言い出せる話題ではない。良妻賢母に磨きをかけて、要するに「失敗」してしまった!

ここに、神の人知を越えた采配の妙を思わず

にはいられない。最悪(?)の事態が思いがけぬ展開を見ることになる。濡れ衣の責任をとられ、くろゆりの山行に洪々保護者同伴で参加した主人が、四十にして山に目覚める。まさかのファミリー山行が始まり、六年後には、いわく因縁の笈ヶ岳に夫婦で立つことができた。「夢のまた夢」とはこのことだ。三男坊の名誉にかけて彼は決して失敗作ではない。「神の啓示」で授かった子である。

---こんなにページを占有していいものか---迷う所ですが---

今回は、急遽OB会報の単独発行を決めた前回よりは時間の余裕があり、若干の執筆依頼を行ったのですが相変わらずの結果でした。

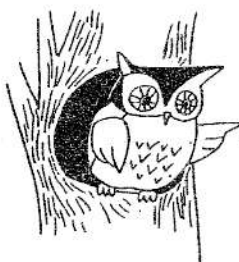
昔からBHの編集長は馬鹿をみるものと決まっていた、それはOBに昇格(?)しても変わらず給料をもらう身になっても、人の親になっても変わらないのですねえ---

できることなら、公平、第三者の冷静な視点で編集を進めたいという願望も、どこか一人相撲になってきて、まずいなあと思いつつ、でもこれだけのエネルギーがなければ、OB会報なんて所詮出来上がらない---「編集長なんて、いつでも替わってやるぞ!」と開き直り、なおも駄文は続くのです。

今年、ナカオのゴールデンウィーク前半の合宿は、滋賀県の己高山・金糞岳でした(次に発行する本の調査のため)。食料係を拝命した私は、久々に鍋でご飯を炊きましたが、鍋の蓋に重石を乗せたり、炊き上がりを逆様にして蒸らす等、昔習った通りのテクニックを駆使。「さすがワンゲル仕込み」と喝采を浴び、「武器」でほかほかご飯を口に運べば、やはり思い出されてくるのはワンゲルの頃のことでした。

今は、会の「社会性ある登山」「生涯登山」のスローガンを、最大限拡大解釈させていただいて、子連れ山行を続けている。子連れの迷惑、興醒めの方は、「参加することに意義がある」で勘弁してもらい、少しでも接点を持ちつつ同行がかなうよう奮戦している。

とはいえ、いずれ三男坊も離れていく。その頃には、ナカオで知り合ったと錯覚しているような夫婦が残るのかもしれない。



今こうして社会人山岳会に所属してみると、どんなにワンゲルで、岳人としてきちんと仕込んでもらったかが、かえって認識できるのです。ファミリー登山の時のコースはもちろん私が選定しますが、(旦那は、突発的に言い出すだけと思っているらしいけれど)避難ルートを考慮し、天候を見定め、行動食や水の量を決めるのも私---こういうことが身につき、山行の余裕となっているのは、何といてもワンゲル暮らしの成果です。

でも、多くのOBには、あるいはそれが逆に意識の上で足枷になっているのかもしれませんが。山というと、山のような荷物、やたらと時間のかかった審議、ツーカーの仲間もない---これらがかえって、かつてのワンダラー達を山から遠ざけているのでは---とも思います。

(以下は現在山離れしているOB向けの文章です。)

かつて、私にもワンゲルがやたらと遠い時代がありました。今、若いOB達もきっとそうだと思いますが、社会へ出てどうにか名刺が板についてきた頃に徐々に仲間の結婚が始まり、披

露宴が同期会替わりとなり、それらが一段落ついたあたりから誰かが音頭をとっての同期会が始まります。時には思いかけぬ計報が混じりもします。それらの時、男なら礼服を取り出し、財布を持てばどこへだって行けますが、女の私にはやはりハンディーがありました。家族の衣食・住の段取りをつけてからでなければ動けない…反対されたとかではなく、自らあきらめるしかありませんでした。地元においても、4回の転居もありました。家庭の基盤作りの時期…もう必死で、余裕もなくて、ワンゲルなんて化石で埃を被っている状態でした。

そんな頃も山は思い出したように行ってはみましたが（医王山とか、小松の勤山）、家のローンの金額に怖じ気づいて車も手放していましたから、頼るのは公共交通機関。時間はかかるし、子供達は山に入る前にくたびれてしまい、帰りはそんな過疎バスの時刻を気にして歩かせねばならず、かえってストレス一杯で帰宅するはめにもなっていました。白山もあまりに遠い山に思えていました。

そんな生活が、今日のように変わったきっかけは、ワンゲルからの25周年記念山行の案内でした。封筒の裏のこ汚い「金沢大学ワンダーフォーゲル部」の文字がなんだかまぶしいようでした。こんな機会でもなければ子供達を白山に連れて行ってやれないと思い、子供二人の分も申し込みました。それでも心配で、確認の電話をかけてきた大川さん（27期）に「大丈夫でしょうか？」と聞いたら、彼女「白山なんて、子供も年寄りも登ってますよ。」と、軽くのたまったのでした。そして記念山行の当日、小二と年長の息子達は、優しい現役のお姉さん達に手を引いてもらい南竜に到着できました。（その後半は15期OB達はわがままを言って頂上ワンデリングに加わらず、別山を経由して降りてしまった。）

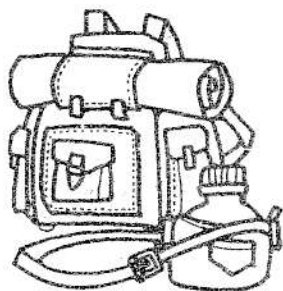
白山の前には訓練と称して、乗鞍や立山を往復してみました。北アルプスの連山を見て「帰ってきたぞ」の思いを強め、それは白山に登りいっそう強い思いとなってあふれてきました。

その次の年の夏山シーズンの始まりに、それまで避けてきた、書店の山の本のコーナーに久々に立ちました。それがナカオの「かがのと百山」との出合となり、山行を再会するきっかけとなりました。

ですから、ワンゲルの現役（現役という存在）には、たいへん感謝しています。あれから、高三郎へは二回登りましたが、二回とも現役達の新トレに出くわし、因縁の笈ヶ岳でも現役（正確には大学院生と5回生）パーティーと遭遇しました。そんなことがたまたま嬉しく、そしてOBとして胸を張っていたい気持ちが、山行の苦しさや、その後の不測の事態も乗り越えさせてくれたように思います。

OBと現役は、つながっている、そしてお互いが良い刺激を与え合う存在でありたいと思います。現役は心揺れる時、数多のOBを思い浮かべ思い直して欲しい。そしてOBの方は現役の情報からあの時代を思い起こし、できれば山に足を向けるようになって欲しい…ほんのわずかの時間で行ける水芭蕉の群生地とか湿原、そして白山や北アの連山を眺める恰好の展望台といったコースがあります。山歩きは生涯スポーツ。せっかくワンゲルで基礎を仕込まれているのだから、あとはやる気次第。OBになるまで続けられたからには、皆にそんな受容体は備わっており、小さなきっかけで連鎖反応が起きてくるように思います。

会報もその一つになってくれれば…せめて、会報の届いた日は空の青さが違って見えてもらえれば…と願っています。



今年（平成6年）の春、第8次を冠する白山-BHPWが計画されましたが、市ノ瀬から大汝までのピストンで終了しました。

そしてワンゲル初の、このルートを使っ
ての夏合宿が、猛暑だったこの夏実施されました。

ルートについて、先に補足しますと、高三郎
から見越山のかつてのワンゲル道はほぼ痕跡な
し。ブナオ峠（五箇山刀利自然休養地として野
営場他の整備が整えられています）から赤摩木
古経由で伸びている登山道と合流する見越山頂
から道はよくなり、奈良岳、大笠山では、むし
ろ馬鹿でかい標柱や、ベンチ・テーブルなどの
設備に興醒めさせられる程です。大笠から、
三方岩岳までは原始のままの秘境の山々が残さ
れています。（大笠山については、今春から、
境川ダム経由フカバラノ尾根コースが開通し、
健脚向きながら日帰り山行が可能となりました）

水については、かつては行動中の最低限の水
の全量を担いでいく方式でした。重量、嵩とも
たいへんな負担をしいられました。現在は、多
くの藪漕ぎパーティーが採っているように、現
地で沢を下りて水を確保してくる方式が採られ
ています。とはいえ、下りは10分程でも戻り
は、水ボリを担ぎ、一日の疲労がどっとでてく
る中で急斜面を一時間以上かけて這い上がり…
死に物狂いの苦労があったようです。ミスター
KUWV達の汗を讀えつつお読み下さい。

'94白山Party

夏合宿の記録

リーダー 山本 英男



8月4日（1日目）晴れ

オロロが襲いかかる中、必死の思いで新道と
つきのテン場へ。早くも下山したい衝動と前
進しなければならないという葛藤に苦しめられ
る。

8月5日（2日目）晴れ-曇

とりあえず高三郎を越えるということを合言
葉に、うだるような暑さの中、夏合宿初めての

ヤブコギに突入。リーダーの判断ミスでテン場
予定地のワンゲル平に着いたのは、就寝時間ま
であとわずかの午後5時。水たまりの水を飲んで
で一息つく。

8月6日（3日目）晴れ-曇

見越山南稜に出てヤブ明けの快感を知る。こ
れからは、快適な登山が続くと思ったら、夏合
宿の行程中、最悪の暑さを体験する。歩き始め
て10秒程でサウナ状態となる。みんなで瀬波川
の冷水を飲んで体力が回復するが、大笠山まで
行けず、登山道の上にテン設することになる。
今日も午後5時到着。

8月7日（4日目）晴れ

大笠山のフカバラの尾根から下山して再び三
方岩に登りかえすという方法を思い付き、前日
そのように決定したが、大笠山のピークに立つ
て笈を見た時、ヤブをこいで笈のピークに立ち
たいという気持ちに押され、とりあえず出発し
た。この日も大笠山の最低鞍部で水を汲む、宝
剣のピークでテン設できそうな場所を見つけ、
テントを張る。宝剣から見た笈は迫力があつた。

8月8日（5日目）晴れ

ようやく笈ヶ岳の山頂に立つ。感慨深いもの
があつたが、やはり笈のピークも蒸し暑かつた。
通称、小笈のテン場という夢テンまで行き、午
後は久しぶりにのんびり過ごした。

8月9日（6日目）晴れ

今日の行程は仙人窟の池塘までなのでそれほ
ど長くない。予定より丸一日遅れているが、と
りあえず一日一日辛抱強く行きたい。仙人窟の
池塘は噂通り快適なテン場だが、池塘の水は小
さな虫だらけで、今まで沢の水を飲んでいた僕
は多少の抵抗を感じた。ここから見た笈・大笠
は白山山系の素晴らしさを全て語っているよう
な感じで、やたら立派に見えた。